

住居志向からみた子どもの住空間認識の発達[†]

——第2報 家庭環境に対する子どもの評価——

中 島 喜代子^{*}

The Development of Children's Recognition of Dwelling House Judging from Children's Intention of It

Part 2, Children's Valuation of Home Environment

Kiyoko NAKAJIMA

SYNOPSIS

The purpose of this study is to grasp the children's recognition and directional intention of dwelling house and home life, and to make it useful materials for their education of housing.

In this paper, the children(junior high school students and senior high school students) have been inquired of their valuation for their home environment.

The following results were obtained.

1) It is difficult for children to judge of their evaluation of their home environment which is connected with their parents' opinion, lives that are not customary, convention and vanity. And senior high school students can judge of their evaluation for their home environment which is connected with their parents' opinion and sense of value, more easily than junior high school students.

2) Senior high school students agree to use the dwelling house more openly than junior high school students. But they deny the conventional, flaunting and indifferent tendency of their home environment more than junior high school students. And girls agree to use the dwelling house more openly than boys.

3) Children's valuation of their home environment is influenced by the actual condition of their home environment, particularly strongly influenced when their valuation is indistinct. And it has been found that senior high school students' evaluation of their home environment in the part where they agree is influenced by the actual condition of their home environment more than junior high school students' one.

4) Using the method of Factor Analysis, it has been found that the structure of senior high school students' evaluation for their home environment is different from the structure of junior high school students' one.

[†] 原稿受理日 昭和61年10月15日

^{*} 三重大大学教育学部

1. 緒言

本研究は、住空間や住生活に対する子どもの志向をとらえることにより、子どもの住空間認識の変化・発達の実態を明らかにし、今後の住教育に役立てることを目的としている。

第1報では、子どもが重視する空間や家具に対する所有要求をとらえることより子どもの住空間認識発達の様相を検討した。

本報第2報では、住空間や家族の生活など子どもをとりまく家庭環境に対して、子どもがそれをどの程度評価（肯定・否定）判断できるか、またどのように受けとめ評価しているかを明らかにする。さらに、家庭環境に対する子どもの評価について、因子分析を用いて評価の構造を検討することにより、住空間や住生活に対する認識や志向が子どもの成長と

ともにどのように変化・発達するのかを分析する。

2. 研究方法

昭和59年7月～9月にかけて、三重県伊勢市内にある小・中・高校を対象に間接留置式の調査を実施した。そのうち、本報告で扱う家庭環境に対する評価の部分の調査については、中・高校生のみを対象とし、中学2年生176件、高校2年生226件の計402件の有効サンプルを用いて分析を行う。調査対象の概要は、第1報のとおりである。

3. 調査結果および考察

表1に示すように、27項目の家庭環境についての調査項目を作成した。これを、『対象の区分』として

表1 家庭環境項目の分類

家 庭 環 境 の 項 目	対 象 の 区 分	対象の広がり	対象の意味内容
1. 居間や寝室よりも客間の方がりっぱである。〈客間豪華〉	空間の実態	客 間	みせびらかし
2. つづき部屋(しょうじやふすまをとりはずすと2つのへやが1つになる)がある。〈つづき間あり〉	〃	つ づ き 間	し き た り
3. 何も使わない部屋がたくさんある。〈不使用室多い〉	〃	不 使 用 室	
4. 家の周りに木を植えたり、へいを作ったりする。〈家の周りに木・ベ〉	〃	家 の 周 圍	
5. 装飾品や家具などが多い。〈装飾品・家具多い〉	〃	生 活 用 品	みせびらかし
6. 家の中がきちんと整理されている。〈家の中が整理されている〉	〃	住 宅 全 体	
7. どの部屋でも自由に出入りできる。〈部屋出入り自由〉	空間の使い方	住 宅 全 体	
8. 両親はよく「男は台所に入るべきではない。」と言っている。〈男台所不可入〉	〃	台 所	し き た り
9. お客さんを居間に通して家族みんなでもてなす。〈居間接客〉	〃	接 客	マイホーム
10. 両親に子供部屋をきれいにするように言われる。〈子供部屋を片付けさせる〉	〃	子 供 部 屋	
11. 両親のへやにかつてに入るとおこられる。〈両親寝室子不可入〉	〃	両 親 室	
12. 両親が仕事や趣味を持っていて熱心である。〈両親仕事熱心〉	生活の実態	両 親 の 生 活	自 律
13. お客さんがよく来る。〈多来客〉	〃	客	
14. おじいさん、おばあさんといっしょに住む。〈祖父母と同居する〉	〃	祖 父 母	
15. 夕食を家族そろってとる。〈夕食は家族そろう〉	〃	夕 食	マイホーム
16. 引越しをよくする。〈引越し多い〉	〃	引 越	
17. 冠婚葬祭(祭や葬式など)をはでに行う。〈冠婚葬祭盛大〉	生活の仕方	行 事 ・ 儀 式	みせびらかし
18. お風呂に入る順番や食事の時の盛り付け順がはっきり決まっている。〈入浴・盛り付け順決まっている〉	〃	風呂・食事室	し き た り
19. 大事なことは家族で話し合って決める。〈家族で話しあう〉	〃	家 族	マイホーム
20. 両親がとなり近所によく気をつかう。〈両親近隣に気を使う〉	〃	近 隣	
21. 両親が地域の活動やPTAによく参加する。〈両親地域活動参加〉	〃	両 親 の 生 活	社 会 重 視
22. 新しい電気製品や道具が発売されるとよく買う。〈新製品購入〉	〃	生 活 用 品	あたらしがり
23. 両親がお手伝いをよくさせる。〈子供に手伝いさせる〉	〃	子 供 の 生 活	
24. ほしいものは何でも買ってもらえる。〈子供にほしいもの購入〉	〃	子 供 の 生 活	
25. 両親が子供に、家や土地を受けつぐように言っている。〈家・土地の相続〉	両親の考え方	家・土地の相続	し き た り
26. 家相や占いを信じる家である。〈家相・占いを信じる家〉	〃	家 相 ・ 占 い	し き た り
27. 両親は、家はねることができればよいと考えている。〈家はねぐら〉	〃	住 宅 の 機 能	ね ぐ ら

く 〉 内は省略項目名

〈空間の実態〉〈空間の使い方〉〈生活の実態〉〈生活の仕方〉〈両親の考え方〉に分類し、また空間と生活の広がりから《対象の広がり》を分類し、さらに《対象の意味内容》の側面からも居住者の価値意識を、同表のように分類した¹⁾。

1) 家庭環境に対する子どもの評価判断の傾向

調査項目の各家庭環境について、それぞれ「いいと思う」(肯定)、「わるいと思う」(否定)、「わからない」(判断不能)のカテゴリーに分けて調査した。

そのうち、「わからない」と答えた者以外を、家庭環境に対して肯定・否定の評価判断ができるものと考え、中・高校生別にその割合(以後、「家庭環境判断率」と記す)を図1に示し、中・高校生別・男女別の割合を図2に示す。

対象全体でみると、「家庭環境判断率」は60%~93%の間に全項目が含まれている。判断率が70%以下の低い値を示す項目は、《対象の区分》では抽象概念を示す〈両親の考え方〉の項目、《対象の広がり》で

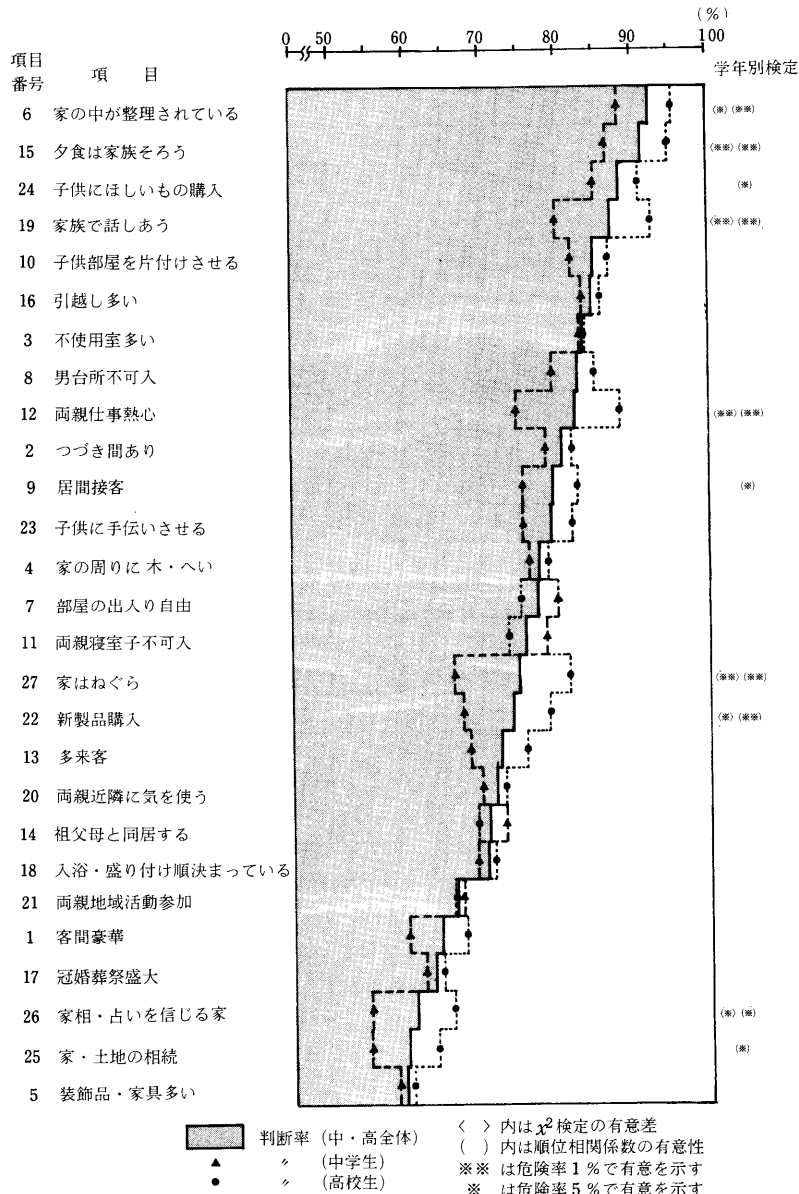
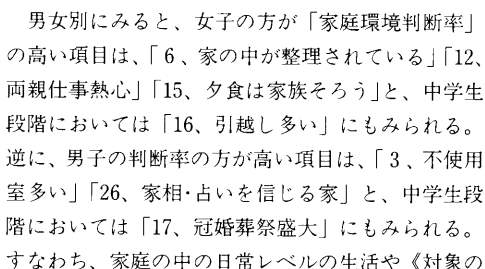


図1 家庭環境に対する子どもの評価判断率



「家庭環境判断率」と「家庭環境肯定率」の関連をみると、判断率の高い項目は肯定率が非常に高い項目と低い項目の両者にみられ、一般的に肯定・否定の志向が明確な家庭環境については、子どもの判

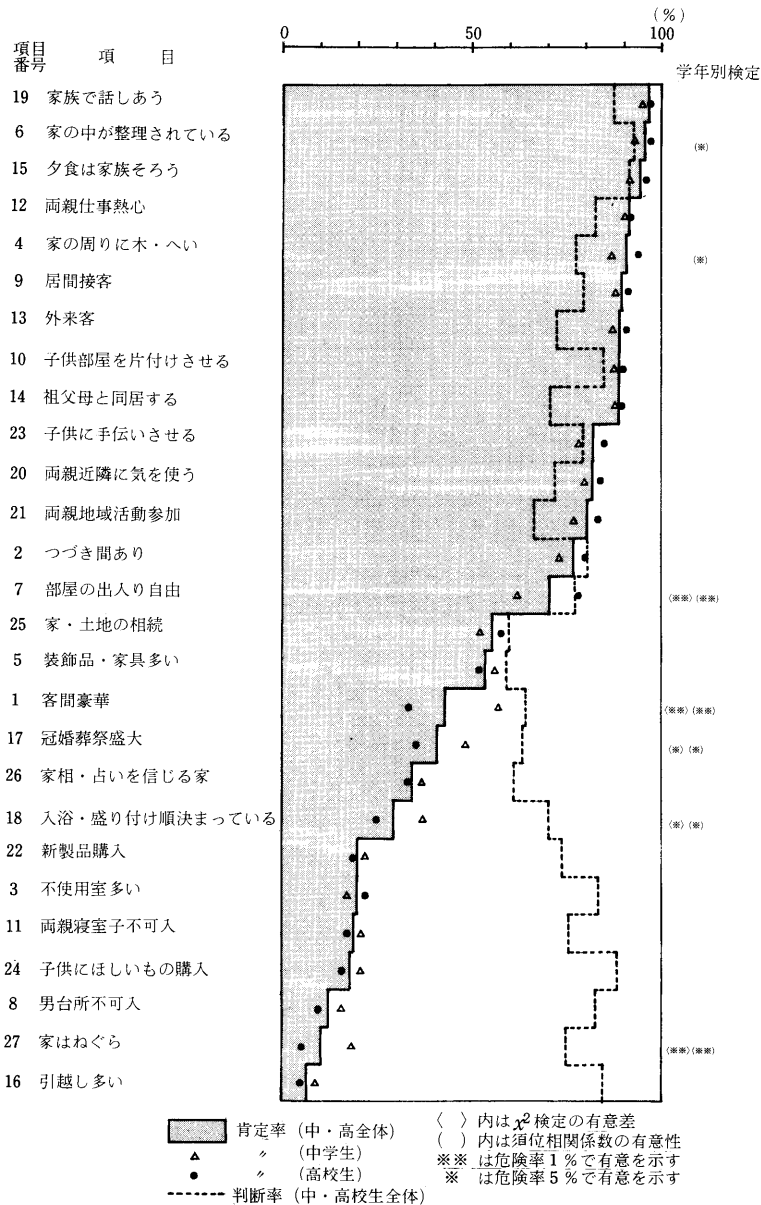


図3 家族環境に対する子どもの肯定率

断も容易であることを示している（図3参照）。

中・高校生全体について、「家庭環境肯定率」が80%を超える項目から子どもが理想とする家庭像をみると、「19、大事なことは家族で話しあう」、「15、夕食は家族そろってとり」、「9、客は居間で家族でもてなす」、「4、家の周りに木やへいを作」り家族のプライバシーを守るという「マイホーム主義」志向の家庭像をもつ。また、「20、両親は仕事や趣味を

もち、「21、地域活動にも積極的に参加する」という両親像をもっている。さらに、「6、家の中が整理されて」おり、「14、祖父母が同居し」、「13、客もよく訪れ」、「10、子供部屋の片付けをさせ」 「23、子供に手伝いをさせる」など子どものしつてもよくし、「20、両親が近隣に気を使う」という近隣との関係も良好な状態を理想としている。逆に、「家庭環境肯定率」が20%以下の項目をみると、「16、引越しし

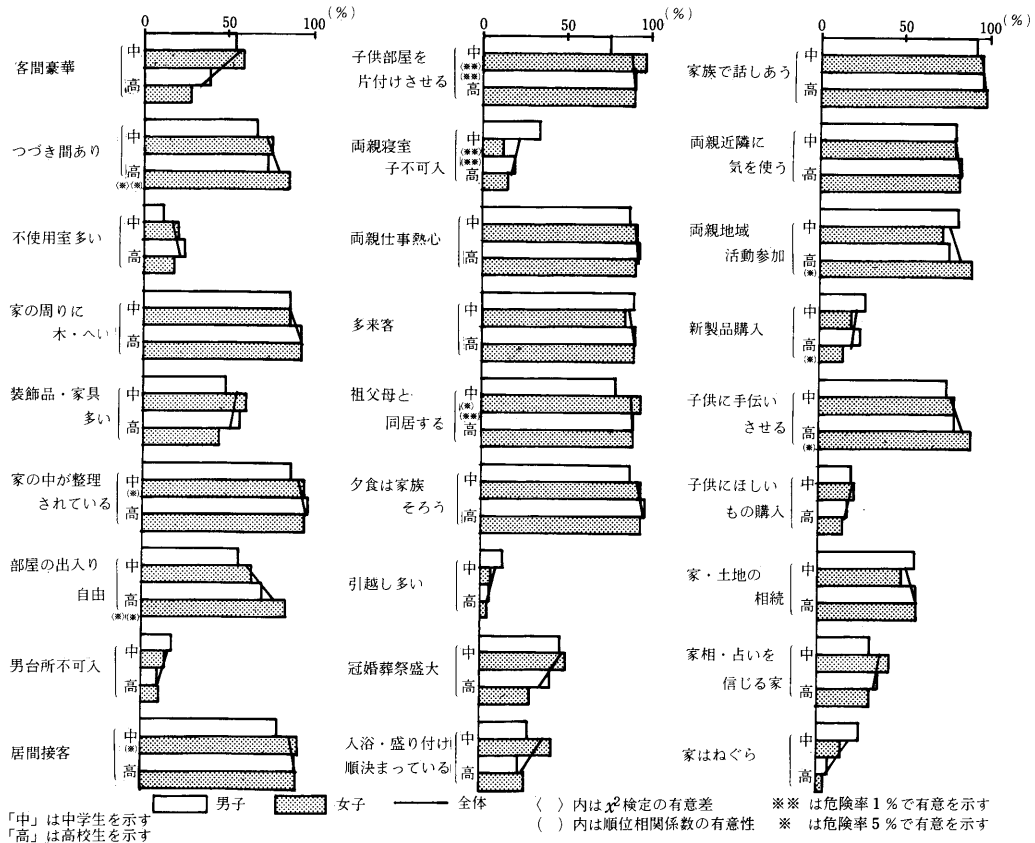


図4 家庭環境に対する子どもの肯定率(男女別・学年別)

は好まず、「27、家は寝られればよい」とする考えを否定しており、また「8、男は台所に入るべきではない」とか「11、両親の寝室に入るべきではない」、「3、不使用室が多い」などの部屋の自由な使い方を妨げる考えや非合理的な空間の使い方を否定し、さらに「22、新製品をすぐ購入」したり、「24、子供にほしいものを購入する」という購入姿勢に対しても否定している。しかし、「17、冠婚葬祭盛大」「1、客間豪華」「15、装飾品・家具多い」「25、家・土地の相続」などの「みせびらかし」や「しきたり」志向の項目については、肯定率が40～60%の値を示しており、肯定・否定の志向が明らかでない状態であるといえる。また、これらの項目は「家庭環境判断率」も低く、この意味からもこれらは子どもの認識・理解が困難な側面であるといえよう。

年齢段階別に「家庭環境肯定率」の差異をみると、学年が進むと「7、部屋の出入り自由」の住宅の開放的使用の志向が強まる。一方、「1、客間豪華」「17、冠婚葬祭盛大」の「みせびらかし」志向や「18、入

浴・盛りつけ順決まっている」「27、家はねぐら」の「しきたり」志向および「ねぐら」志向については、否定志向が強まる傾向がみられる(各項目ともに順位相関係数に有意性あり)。すなわち、学年が進むと肯定志向の強い項目はより肯定志向が強まり、否定傾向のある項目はより否定志向が強まっており、家庭環境に対する評価はより明確になるといえよう(図3参照)。

男女別に、学年による「家庭環境肯定率」の差異をみると、女子では「1、客間豪華」「5、装飾品・家具多い」「17、冠婚葬祭盛大」「18、入浴・盛りつけ順決まっている」「27、家はねぐら」などの「みせびらかし」および「しきたり」「ねぐら」等の志向は学年が進むと低下し、「2、つづき間あり」「7、部屋の出入り自由」などの住宅の開放的使用に対する志向は強くなる。一方、男子では「6、家の中が整理されている」「9、居間接客」「10、子供部屋を片付けさせる」「15、夕食は家族そろろう」「7、部屋の出入り自由」などの肯定率は学年とともに上昇し、

「16、引越し多い」「11、両親寝室子不可入」「27、家はねぐら」は低下している。すなわち、「マイホーム主義」志向や住宅の開放的使用の志向が強くなり、「ねぐら」志向に対する否定志向が強くなっている（各項目とも順位相関係数に有意性あり）。したがって、女子では「みせびらかし」や「しきたり」否定志向は、高校生で強くなり、男子では高校生で「マイホーム主義」志向が強くなるといえよう（図4参照）。

次に男女別に「家庭環境肯定率」の差異をみると、中学生段階で「6、家の中が整理されている」「9、居間接客」「10、子供部屋を片付けさせる」「14、祖父母と同居する」、高校生段階で「2、つづき間あり」

「7、部屋の出入り自由」などの項目において女子の肯定率の方が高く、逆に「11、両親寝室子不可入」は中学生段階で男子の肯定率の方が高くなっている（各項目とも順位相関係数に有意性あり）。すなわち、女子の方が住宅の開放的使用を志向する傾向が男子より強く、また中学生段階では女子の方が「マイホーム主義」志向の傾向が強い（図4参照）。

3) 家庭環境の実態が子どもの家庭環境に対する評価に及ぼす影響

子どもが、各家庭環境項目に対して示す評価（肯定・否定）と、その家庭環境の実態との関連を検討し、家庭環境の実態が住空間や住生活の諸側面につ

表2 家庭環境の実態と家庭環境に対する評価の関連

・数字は順位相関係数

項 目	学 年 性 別			中 学 生			高 校 生		
	全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子
1. 客間豪華	0.395**	0.435**	0.358**	0.419**	0.542**	0.347**	0.343**	0.347**	0.354**
2. つづき間あり	0.206**	0.178*	0.230**	0.251**	0.311*	0.209*	0.153*	0.091	0.216*
3. 不使用室多い	0.186**	0.226**	0.141*	0.210**	0.352**	0.197*	0.167*	0.203*	0.119
4. 家の囲いに木・へい	0.395**	0.321**	0.456**	0.437**	0.292*	0.533**	0.333**	0.329**	0.341**
5. 装飾品・家具多い	0.294**	0.263**	0.323**	0.403**	0.394*	0.427**	0.220**	0.262*	0.170
6. 家の中が整理されている	0.132*	0.061	0.209**	0.234**	0.247*	0.194	0.075	-0.131	0.258*
7. 部屋の出入り自由	0.411**	0.419**	0.403**	0.408**	0.455**	0.367**	0.399**	0.372**	0.443**
8. 男台所不可入	0.065	0.021	0.100	0.113	0.034	0.173	0.007	-0.047	0.039
9. 居間接客	0.232**	0.248**	0.206**	0.233**	0.282*	0.143	0.254**	0.256*	0.252*
10. 子ども部屋を片付けさせる	0.205**	0.191*	0.173*	0.232**	0.221	-0.048	0.196**	0.185*	0.216*
11. 両親寝室子不可入	0.344**	0.299**	0.387**	0.478**	0.359**	0.590**	0.154*	0.154	0.156
12. 両親仕事熱心	0.278**	0.350**	0.207**	0.208*	0.348*	0.036	0.319**	0.361**	0.285**
13. 多来客	0.147*	0.061	0.218**	0.040	0.010	0.059	0.218**	0.077	0.357**
14. 祖父母と同居する	0.202**	0.198*	0.189*	0.204*	0.276*	0.080	0.200**	0.131	0.275**
15. 夕食は家族そろう	0.150**	0.079	0.219**	0.103	0.072	0.116	0.177**	0.015	0.303**
16. 引越し多い	0.128*	0.093	0.166*	0.098	0.028	0.151	0.156*	0.134	0.183*
17. 冠婚葬祭盛大	0.473**	0.445**	0.511**	0.536**	0.418**	0.658**	0.392**	0.453**	0.336**
18. 入浴・盛り付け順決まっている	0.375**	0.399**	0.351**	0.395**	0.319*	0.432**	0.371**	0.451**	0.293**
19. 家族で話しあう	0.104*	0.116	0.067	0.079	0.270*	-0.126	0.133*	0.032	0.286**
20. 両親近隣に気を使う	0.446**	0.424**	0.470**	0.438**	0.369**	0.492**	0.450**	0.467**	0.438**
21. 両親地域活動参加	0.243**	0.319**	0.181*	0.196*	0.182	0.172	0.273**	0.423**	0.119
22. 新製品購入	0.461**	0.445**	0.462**	0.536**	0.536**	0.520**	0.412**	0.399**	0.409**
23. 子どもに手伝いさせる	0.033	0.039	-0.005	0.132	0.286*	-0.046	-0.026	-0.100	0.068
24. 子どもにほしいもの購入	0.242**	0.326**	0.156*	0.206*	0.290*	0.148	0.269**	0.349**	0.147
25. 家・土地の相続	0.264**	0.339**	0.186*	0.251*	0.363*	0.165	0.261**	0.328**	0.173
26. 家相・占いを信じる家	0.613**	0.568**	0.662**	0.656**	0.559**	0.730**	0.585**	0.587**	0.577**
27. 家はねぐら	0.363**	0.471**	0.217**	0.503**	0.662**	0.255*	0.144*	0.126	0.174

**は危険率1%で有意性があることを示す

*は危険率5%で有意性があることを示す

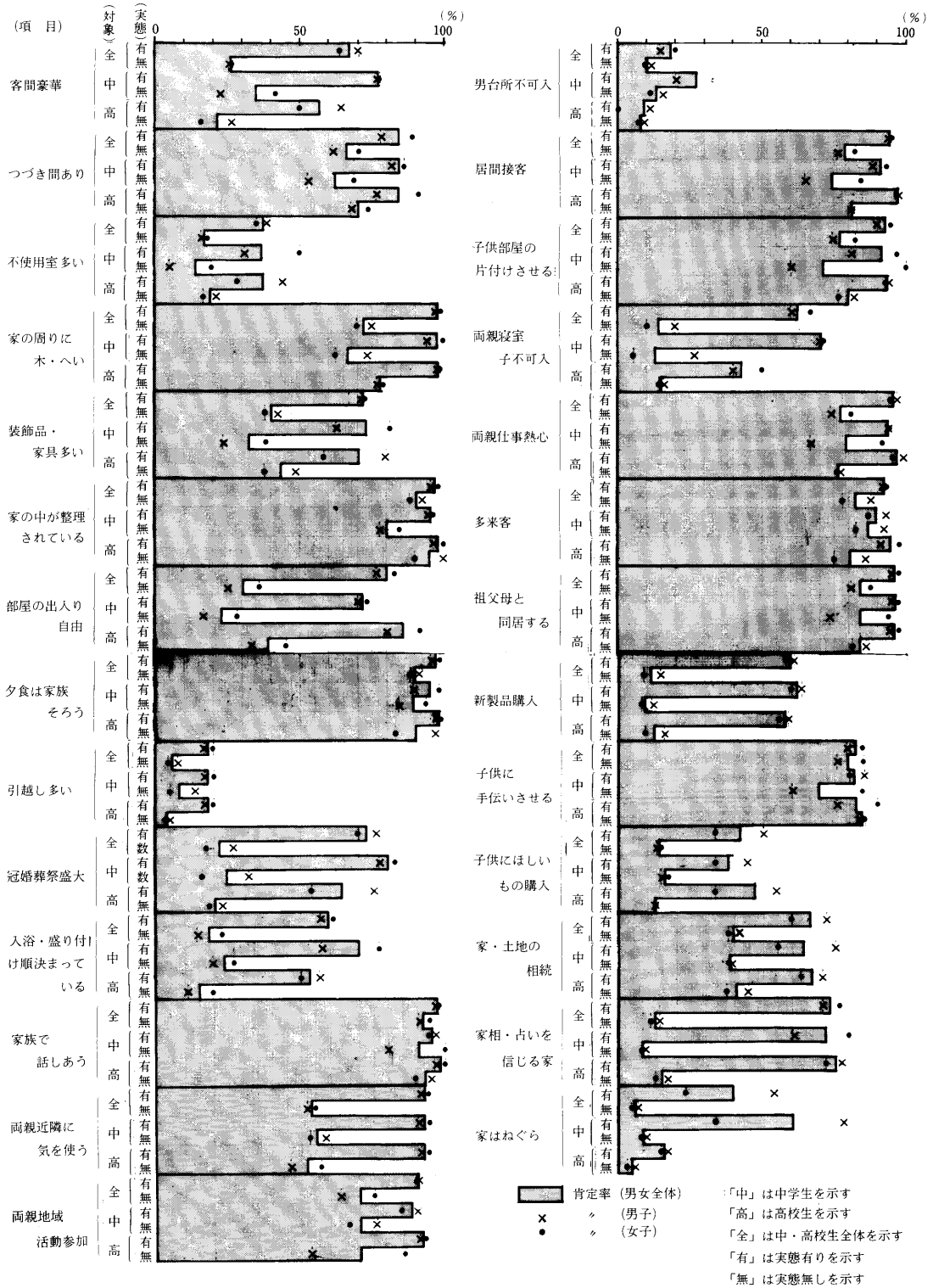


図5 家庭環境の実態の有無別家庭環境に対する肯定率*

いての子どもの考え方に対してどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

各家庭環境項目についてその実態の有無と、家庭環境に対する評価との順位相関係数を表2に示す。図5には、家庭環境実態の有無別についての「家庭環境肯定率」を示す。

まず、家庭環境の実態と家庭環境に対する評価との順位相関係数を検討する。対象全体では、「8、男台所不可入」と「23、子供に手伝いさせる」の2項目を除くすべての項目において、正の相関で危険率5%までの有意性がみられ、家庭環境の実態が子どもの考え方を与える影響は大きいといえる。中・高校生別にみると、順位相関係数に危険率5%までの有意性がみられないのは、中学生では「8、男台所不可入(15.4%)」「13、多来客(87.1%)」「15、夕食は家族そろ(91.9%)」「16、引越し多い(8.4%)」「19、家族で話し合う(94.9%)」「23、子どもに手伝いさせる(78.3%)」等の項目があり、高校生では「8、男台所不可入(9.6%)」「6、家の中が整理されている(97.2%)」「23、子どもに手伝いさせる(84.7%)」等の項目がある(数字は「家庭環境肯定率」)。これらの項目は「家庭環境肯定率」が16%以下の否定志向の強い項目と78%以上の肯定志向の強い項目であり、いずれも子どもの志向が明確な項目であるといえる。すなわち、肯定率や否定率が非常に高い項目については、子どもの志向は実態に関係なく現われ、実態から受ける影響は弱いといえよう(表2参照)。

対象全体について0.35以上の高い順位相関係数を示す項目をみると、「17、冠婚葬祭盛大(41.0%)」「1、客間豪華(42.9%)」等の「みせびらかし」志向を示す項目、「26、家相・占いを信じる家(34.3%)」「18、入浴・盛りつけ順決まっている(29.7%)」などの「しきたり」志向を示す項目および「22、新製品購入(19.9%)」の「あたらしがり」志向の項目と「27、家はねぐら(10.2%)」の「ねぐら」志向の項目等があり(数字は「家庭環境肯定率」)、すまいや生活についての価値意識に関わる部分において実態から受ける影響は大きい。また、「7、部屋の出入り自由(70.6%)」「4、家の周りに木・へい(77.6%)」「20、両親近隣に気を使う(81.9%)」などの項目も順位相関係数0.35以上を示し、実態から受ける影響は大きい(表2参照)。これら相関の強い項目は、当然その実態の有無による「家庭環境肯定率」の差がかなり大きくなっており(図5参照)、また「家庭環境肯定率」が20~80%の間に多く含まれ、子どもの

志向が明確でない項目に多い傾向がみられる。

学年による順位相関係数の差異をみると、「27、家はねぐら」の「ねぐら」志向の項目、「17、冠婚葬祭盛大」「5、装飾品・家具多い」「1、客間豪華」の「みせびらかし」志向の項目、「22、新製品購入」の「あたらしがり」志向の項目、「2、つづき間あり」「26、家相・占いを信じる家」の「しきたり」志向の項目などについては、中学生の方が実態からの影響を強く受けている。一方、「12、両親仕事熱心」「21、両親地域活動参加」などの両親の生活に関する項目や「15、夕食は家族そろ」「19、家族で話しあう」などの「マイホーム主義」志向の項目では、高校生の方が実態から受ける影響が大きくなっている。すなわち、中学生の方が実態からの影響を強く受けている項目は、一般的に「家庭環境肯定率」があまり高くない項目であり、高校生の方が実態からの影響を強く受けている項目は、「家庭環境肯定率」が高い項目であるといえる(表2参照)。

次に、家庭環境実態の有無別に、中学生と高校生との「家庭環境肯定率」の差異をみると、実態が存在する場合に中学生と高校生との肯定率の差が15%以上ある項目には、「1、客間豪華」「17、冠婚葬祭盛大」「18、入浴・盛りつけ順決まっている」「8、男台所不可入」「27、家はねぐら」「11、両親寝室子不可入」等があり、これらはすべて中学生の方が肯定率の高い項目である。また実態が存在しない場合には、中・高校生間の肯定率の差が15%以上あるのは「7、部屋の出入り自由」項目にみられ、高校生の方が肯定率が高い。すなわち、前節においてとらえた家庭環境に対する評価の中・高校生間の差異は、「みせびらかし」「しきたり」「ねぐら」否定志向が高校生で強くなるという傾向であったが、それらの家庭環境の実態が存在しない場合には、中・高校生の肯定率はあまり変わらず、この傾向は家庭環境の実態が存在する場合の差異に多くよっていることが明らかであり、高校生ではこれらの家庭環境の実態を否定的に受けとめるようになるといえよう(図5参照)。

4) 家庭環境に対する評価の構造

家庭環境に対する評価の構造をとらえるため、各家庭環境項目について<いいと思う><わるいと思う>のカテゴリー分類で因子分析を行った²⁾。表3に、対象全体と中・高校生別に因子分析の結果を示す。

対象全体では9因子抽出され、因子の寄与率は第2因子までで約50%を占めている。各因子の構成を

表 3 家庭環境に対する評価の因子分析結果

(全 体)			(中学生)			(高校生)		
FAC-TOR	変 数	因 子 負荷量	FAC-TOR	変 数	因 子 負荷量	FAC-TOR	変 数	因 子 負荷量
1 (35.4)	家の中が整理されている	0.68	1 (31.6)	子供部屋を片付けさせる	0.68	1 (28.0)	家の中が整理されている	0.66
	子供部屋を片付けさせる	0.63		家の中が整理されている	0.63		大きなことは家族で話し合う	0.64
	大きなことは家族で話し合う	0.50		居間接客	0.51		子供部屋を片付けさせる	0.63
	夕食は家族そろろう	0.50		夕食は家族そろろう	0.49		夕食は家族そろろう	0.58
	両親仕事熱心	0.47		両親仕事熱心	0.45		両親仕事熱心	0.58
	居間接客	0.44		大きなことは家族で話し合う	0.35		祖父母と同居する	0.43
2 (15.9)	多来客	0.59	2 (14.6)	つづき間あり	0.67	2 (12.4)	家の周りに木・へい	0.37
	両親近隣に気を使う	0.58		部屋の出入り自由	0.63		つづき間あり	0.36
3 (9.3)	夕食は家族そろろう	0.53		祖父母と同居する	0.43	3 (11.1)	新製品購入	0.70
	子供に手伝いさせる	0.48	3 (10.8)	子供部屋を片付けさせる	0.38		装飾品・家具多い	0.60
	子供にほしいもの購入	-0.47		子供にほしいもの購入	0.72		子供にほしいもの購入	0.56
	祖父母と同居する	0.42	4 (9.5)	新製品購入	0.52	4 (9.8)	部屋の出入り自由	0.79
4 (8.9)	新製品購入	0.65		子供に手伝いさせる	-0.36		冠婚葬祭盛大	-0.51
	装飾品・家具多い	0.58		家の周りに木・へい	0.52	5 (8.2)	子供に手伝いさせる	0.78
5 (7.6)	子供にほしいもの購入	0.43		祖父母と同居する	0.51		祖父母と同居する	0.39
6 (6.9)	部屋の出入り自由	0.66	5 (7.4)	夕食は家族そろろう	0.46	6 (7.3)	子供にほしいもの購入	-0.36
	つづき間あり	0.47		装飾品・家具多い	0.38	7 (6.0)	多来客	0.64
7 (6.5)	家・土地の相続	0.60	6 (6.2)	多来客	0.66		居間接客	0.60
	家相・占いを信じる家	0.51		大きなことは家族で話し合う	0.55	8 (5.0)	家相・占いを信じる家	0.64
8 (5.2)	冠婚葬祭盛大	0.36	7 (6.0)	両親近隣に気を使う	0.48		家・土地の相続	0.58
9 (4.3)	男台所不可入	0.61	8 (5.3)	家・土地の相続	0.69	9 (4.5)	つづき間あり	0.36
	冠婚葬祭盛大	0.36		家はねぐら	0.55	10 (4.1)	入浴・盛り付け順決まっている	0.80
10 (4.2)	入浴・盛り付け順決まっている	0.55	9 (4.4)	家相・占いを信じる家	0.36		両親近隣に気を使う	0.82
	両親寝室子不可入	0.48	10 (4.2)	冠婚葬祭盛大	0.78	11 (3.6)	引越しい多い	-0.43
11 (3.6)	引越しい多い	0.39		客間豪華	0.61		男台所不可入	0.51
				入浴・盛り付け順決まっている	0.44	12 (3.6)	冠婚葬祭盛大	0.40
12 (3.6)			11 (3.6)	引越しい多い	0.70		不使用室多い	0.37
				男台所不可入	0.75	13 (3.6)	両親寝室子不可入	0.61
							家はねぐら	0.68

(注)・()内の数字は寄与率
・0.35以上の因子負荷量の変数のみを示した

みると、第1因子は「マイホーム主義」志向と家の中の整理や片付けに関する因子、第2因子は接客と近隣関係因子、第3因子は子どものしつけと「マイホーム主義」志向に関する因子、第4因子は生活用品関連因子、第5因子は空間の開放的使い方因子、第6～第8因子は「しきたり」志向関係因子、第9因子は両親寝室子不可入因子であり、「しきたり」志向因子は、《対象の区分》が〈両親の考え方〉〈空間の使い方〉〈生活の仕方〉の各因子に分離している。

次に、中学生と高校生の因子分析結果を比較する。

①「マイホーム主義」志向に関する項目は、中・高校生ともに第1因子に含まれ、いずれの場合も住

空間の整理や片付け、両親の生活を含んだ因子となっている。しかし、高校生では「14、祖父母との同居」や住宅のプライバシーに関わる「4、家の周りに木・へい」の項目を含んでいるのに対し、中学生ではこれらの項目は第4因子に分離している。また、「マイホーム主義」志向に関する項目のうち、「9、居間接客」項目は、中学生では第1因子に含まれているが、高校生では「13、多来客」項目とともに、別に第5因子において接客関連因子を形成している。すなわち、中学生の場合マイホーム主義の考え方は核家族のイメージとつながっているが、高校生では拡大家族のイメージとつながっており違いがみられ

る。

②「しきたり」志向に関する項目は、中・高校生ともに対象全体の場合と同様に3因子に分離している。また、中・高校生ともに「しきたり」志向と「みせびらかし」志向との関連は強い。しかし、中学生では「しきたり」志向項目のうち、「25、家・土地の相続」「26、家相・占いを信じる家」の項目が、「27、家はねぐら」項目の「ねぐら」志向と同一因子を形成し（第6因子）、「ねぐら」志向との関連が強いのにに対し、高校生ではそれぞれ独立因子を形成している（第6因子と第11因子）。

③「あたらしがり」志向の「22、新製品購入」項目は、中・高校生ともに「24、子どもにほしいもの購入」項目と結びついて同一因子を形成しているが、高校生ではこの因子の中に「6、装飾品・家具多い」項目も含まれており（第2因子）、モノの購入とモノの多所有志向とが関連をもっている。

④「7、部屋の出入り自由」という部屋の使い方の項目は、中学生では「2、つづき間あり」「14、祖父母同居」項目と同一因子を形成しており（第2因子）、「しきたり」的空間使用としてとらえられていると考えられる。一方、高校生では同一因子に含まれている「17、冠婚葬祭盛大」の因子負荷量が、マイナスになっており、「みせびらかし」志向を否定する空間使用としてとらえられている（第3因子）。

以上のように、「マイホーム主義」「しきたり」「ねぐら」「あたらしがり」志向の項目に関する因子や、空間の使い方に関する因子にも中学生と高校生の間にそれぞれ差異がみられ、家庭環境に対する評価の構造に違いが存在している。

4. 結語

子どもの家庭環境に対する評価の判断および評価内容の傾向を明らかにすることにより、住空間認識の様相をとらえるため、中・高校生を対象に調査分析し、その結果以下の知見を得た。

1) 子どもの「家庭環境判断率」は、《対象の区分》では抽象的概念を示す〈両親の考え方〉の側面で低く、《対象の広がり》では非日常的空間や生活、近隣や他家族員個人の生活の側面および《対象の意味内容》では「しきたり」「みせびらかし」志向の側面についても低く、認識が困難であることが明らかとなった。また、学年が進むと《対象の区分》が〈両親の考え方〉の側面および《対象の意味内容》では各種の価値意識を含む項目において「家庭環境判断率」

が上昇し、住空間認識が発達することが明らかになった。性別でみると、家庭内の日常レベルの生活や「マイホーム主義」志向の側面では女子は男子より「家庭環境判断率」が高く、日常生活の枠組みからはずれた部分や「しきたり」「みせびらかし」志向に関する側面では男子は女子より判断率が高い。

2) 「家庭環境肯定率」をみると、子どもは「マイホーム主義」志向の家庭像をもち、社会的・自律的な生き方をする両親像を理想としている。また「ねぐら」志向や空間の非合理的使い方を否定し、住空間の自由な使い方を志向しているが、「みせびらかし」志向や「しきたり」志向の一部分については評価は定まっていない。学年による差異をみると、高校生になると住宅の開放的使用の志向が強まり、「みせびらかし」「しきたり」「ねぐら」などの志向については否定する傾向が強くなるなど肯定と否定の志向がより明確になり、住空間認識は発達するといえる。性別でみると女子は男子より住宅の開放的使用を好む傾向がみられた。

3) 家庭環境の実態と家庭環境に対する評価との関連をみると、大部分の項目において家庭環境の実態が子どもの家庭環境に対する評価に影響を与えていることが認められた。その中で、特に評価に与える影響が大きいのは、子どもの評価の傾向が明確でない側面で多くみられ、逆に評価が明確になっている側面では実態が与える影響度は比較的小さいことが明らかになった。また、学年別にみると中学生では「ねぐら」「みせびらかし」「あたらしがり」「しきたり」などの志向に関する項目や空間の使い方の側面で高校生より実態から受ける影響が大きく、高校生では「マイホーム主義」志向の側面で中学生より実態から受ける影響が大きい。すなわち、高校生になると一般的に否定傾向が強い側面については実態から受ける影響は弱まり実態と関係なく否定するようになる。また、肯定傾向が強い側面ではより強い影響を受けるようになり、実態を批判的に受け止める姿勢が現われるといえよう。

4) 家庭環境に対する評価の構造をみると、中学生と高校生ではよく似た因子の構成であるが、中学生では「しきたり」志向と「ねぐら」志向との関連がみられるのに対し高校生ではみられないこと、部屋の開放的使用が高校生では「みせびらかし」志向を否定する使い方として位置付けられているのに対し、中学生では「しきたり」志向の伝統的使い方の中で位置付けられていることなどの差異がみられた。

注

- 1) 価値認識の類型については、
中島喜代子：「住居観に関する研究（その1）
住意識の構造分析」、三重大学教育学部研究紀要、
34（1983）において、これと関連する住居観型の
仮説の設定とその説明をしている。
- 2) 因子分析の因子抽出法は、共通性の反復推定主
因子解を用い、因子数は1.0以上の固有値をもつ因
子とし、共通推定値間の差が0.001以下になるまで
計算を繰り返すこととした。また、因子の回転に
は、バリマックス回転を用いた。